令和４年度「未来を創る学力向上支援事業」に係る

未来を創る授業力向上協議会（小学校国語）

１.目的

各小学校（義務教育学校前期課程を含む。以下同じ）の教員等を対象に、学習指導要領の趣旨を踏まえた授業づくり及び授業改善に関する講義・説明等を行うことにより、小学校教員の指導力向上を図り、もって児童の学力向上に資する。

２.主催　大分県教育委員会

３.期日　令和４年５月３１日（火）１３：３０～１６：２０

４.場所　コンパルホール（多目的ホール）

５.内容

① 行政説明及び協議（大分県小学校国語科の課題と授業改善）

＜説明者＞大分県教育庁義務教育課　指導主事　　瀧口　忍

- 令和３年度全国学力・学習状況調査の概要
- 令和３年度大分県学力定着状況調査の概要
- 令和３年度全国学力・学習状況調査（小学校国語）の分析
  - 課題が見られた問題と指導の改善

大問２　設問四【平均正答率　大分県 28.9%　全国 29.7%】 目的を意識して、中心となる語や文を見付けて要約することができるかどうかを見る問題

(1) 問題文の読み取りに課題がある。
→児童自身に問題文を分割して捉えさせることで、必要な情報が何かを明確にする。スモールステップを踏みながら、日常生活につなげていく問いにする。

(2) 必要な情報を見付けることに課題がある。
→この問題では、「①面ファスナーのよさ」「②面ファスナーの国際宇宙ステーションの中での使われ方」が書かれているところ、それぞれに線を引かせる。

(3) 必要な情報を指定文字数でまとめること（要約する力）に課題がある。
→選んだ中心となる語や文をそのまま生かしたり、自分の言葉を用いたりして短くまとめる力の定着が必要。例えば、３・４年生の学習を想起させながら、５・６年生の学習で書かせる内容や場面を工夫して定着を図ることも考えられる。
→また、目的や要約する分量について、十分に検討することが重要。効果的な学習とするために、「教師自身が一度要約してみること（モデルの作成）が大切である。

- 授業改善を進めるためには

1　児童の実態を捉える

2　育成を目指す資質・能力の明確化

・「児童の実態」と「年間指導計画」の両方から検討し、教材の特徴を踏まえて適切に判断する。

・前学年の指導内容を受けて、何を新たに身に付けさせるのか、違いは何か。

3　適切な言語活動の設定

身に付けたい資質・能力に合わせて、思考、判断、表現する場面がある言語活動の設定をする。

4　資質・能力の定着を確認する適切な評価規準の設定
5　支援を要する児童に対する手立ての工夫

- 文科省 HP にある「授業アイデア例」、県教委の「早わかり！単元計画の作成手順」の活用を

② 講義「学習指導要領の趣旨を踏まえた授業づくりと評価」

＜講師＞文部科学省初等中等教育局　教育課程課　教科調査官
国立教育政策研究所　教育課程センター　研究開発部　教育課程調査官
大塚　健太郎　氏

＜小学校国語科の目標について＞

・ 言葉による見方・考え方を働かせるとは
　対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めること。
・ 言葉の意味、働き、使い方に着目して捉えたり、問い直したりするとは
　言葉で表される話や文章を、意味や働き、使い方などの言葉のさまざまな側面から総合的に思考・判断し、理解したり表現したりすること。その理解や表現について、改めて言葉に着目して吟味すること。

＜学習評価の改善の基本的な方向性＞

① 児童生徒の学習改善につながるものにしていくこと
② 教師の指導改善につながるものしていくこと
③ これまで慣行として行われてきたことでも、必要性・妥当性が認められないものは見直していくこと

＜「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料を使い、評価方法の事例紹介＞

【知識及び技能】世代による言葉の違いに気付いている。
→漢字を用いた言い方と片仮名を用いた言い方、及び「～る」、「～い」という言い方について世代ごとの傾向に関する情報を資料から収集し、ノートに整理している。そして高齢者が漢字を用いた表現をよく使う傾向にあることや「パニクる」「うざい」などの言葉を使う割合が若い世代と高齢者で異なるということを記述している。このような記述から「おおむね満足できる状況（B)」と評価

(「おおむね満足できる状況（B)」と評価した児童の記述例)

・ 使用している言葉が世代によって一部異なっていることを示す情報を発見してノートに整理している。
・ ノートに整理した情報からわかったことを記述している。

【思考・判断・表現】「書くこと」において、事実と感想、意見を区別して書くなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫している。
→信頼できる資料から得られた情報が、割合などの数値を伴って示され、それに基づいて分かったことや考えたことが書かれている場合、「おおむね満足できる状況（B)」と評価

(「おおむね満足できる状況（B)」と評価した児童の記述例)

・ 客観的な裏付けとなるように、事実の出典が明記されている。
・ 具体的な数値の記述
・ 客観的な事実から述べられていることがわかる文末表現

【主体的に学習に取り組む態度】粘り強く、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫し、学習の見通しをもって意見文を書こうとしている。
→書き表し方の工夫について振り返っているとともに、友達や教師と交流した際に得た指摘や助言を踏まえて書き表し方をさらに良いものにしようと粘り強く試行錯誤する様子が見られたと判断し、「おおむね満足できる状況（B)」と評価

（「おおむね満足できる状況」（B）と評価した児童の記述例）

- 書き表し方について A さんから指摘をもらう。
- A さんの指摘を受けて次時に修正しようとしている。
- 教師から受けたアドバイスを取り入れている。

● 指導事項の明確化
  - 子どもに寄り添いながらも、指導すべき点を明確に教師がもっていること
    （加えて、指導事項に照らして１人１台端末をどのように使えば効果的か考える）

● 指導計画　学習の見通し
  - 今までの学習を活用していること
  - 個別最適な学びと協働的な学びの意識があること
  - 学習のまとまりを意識した単元展開

● 言語活動を通した資質・能力の育成
  - 学年発達に応じた学習展開を行っていること
  - 指導事項を意識して言語活動が行われていること

＜「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善＞
学習者視点と授業者視点の両方で見ていくことが必要
（https://www.nier.go.jp/05_kenkyu_seika/pdf_seika/r02/r020603-01.pdf
国立教育政策研究所 HP 参照）

（了）